



京大広報

No. 559

2001.7

目次

全学に訴える - セクシュアル・ハラスメントの防止について -1104

大学の動き

長尾総長のアメリカ合衆国、中華人民共和国及びフランス共和国訪問...1105

長尾総長の中華人民共和国訪問.....1105

博士学位授与式.....1105

人権に関する研修会の開催.....1106

創立記念式の挙行.....1106

平成13年度外国人留学生歓迎パーティ.....1107

部局の動き

総合博物館いよいよ公開.....1108

日誌1109

訃報1109

随想

教育不在? 名誉教授 布川 昊.....1110

洛書

国際援助について思う 中原俊隆.....1111



祝辞を述べる小野文部科学事務次官



挨拶をする瀬戸口総合博物館長

関連記事本文1108ページ

京都大学広報委員会

全学に訴える -- セクシュアル・ハラスメントの防止について --

平成13年6月21日
京都大学人権問題対策委員会

大学院文学研究科教授が平成11年10月末から平成12年2月中旬までの約3カ月半の間、当時4回生の女子学生に対して卒業論文・大学院入試指導を名目に、頻りに二人だけの面談を強要し学外で酒食を共にした。その際、当該教授は女子学生に不快感や強い威圧感、さらには将来に対する危機感を与える言辞を弄した。このような行為は明らかにセクシュアル・ハラスメントに該当するものである。その結果、女子学生は大学院入試に合格したにもかかわらず大学院への進学断念を余儀なくされた。また、大学院入試の出題者であり採点者でもある当該教授が、入試の受験者である女子学生に対して、入試直前まで細部にわたる立ち入った入試指導を行うとともに、入試の論文審査の対象となる卒業論文に度重なる入念な添削を繰り返したことは、入試の公平性を著しく損ない、大学院入試を担当する教官としての職務上の義務に違反し、国民全体の奉仕者たるにふさわしくない行為と言わざるを得ない。そのため、6月19日に開かれた評議会は、同教授に懲戒・停職3月間の処分を決定した。また、文学部・文学研究科は、独自の措置として、同教授を平成13年4月1日から10年間、大学院入試（修士・博士課程）に関係させないこと及び大学院入試・博士課程進学に関わる論文指導をさせないことを決定した。

京都大学としては、下記の6月19日付けの告示（平成13年6月19日告示第3号）をもって、この事態を深く反省し、今後とも全学をあげてセクシュアル・ハラスメントを防止するため、真摯に取り組む決意

告示第3号

大学院文学研究科教授が、女子学生にセクシュアル・ハラスメントに該当する行為を行い、その結果、当該学生に大学院進学を断念させたこと、また職務上の義務に違反したことから、本日、同教授を懲戒・停職3月間の処分とした。教育・研究の場において、このような事態が生じたことは誠に遺憾である。

本学においては、これまでセクシュアル・ハラスメントの防止のために鋭意努力してきたが、この

を明らかにした。

人権問題対策委員会にあっても、これまで機会あるごとにセクシュアル・ハラスメントの防止のための啓発・教育活動に努めていただけない、このたび、このような恥ずべき事態が生じたことは痛恨の極みであり、事の重大さを深く受け止め、セクシュアル・ハラスメントの再発防止と学生、教職員が安心して勉学と業務の遂行に専念できる学内環境の確立のために尽力する決意を新たにした。

具体的に言えば、まず第一に、当該女子学生が二次的人権侵害を受けることのないよう全力を尽くす。第二に、セクシュアル・ハラスメントの被害を受けた、又は受けていると感じた学生・教職員が相談や苦情申し立てが容易にできるよう各部局に置かれている窓口相談員のために、マニュアル冊子の配付や研修の充実を図る。第三に、カウンセリングセンターと各部局の相談窓口並びに人権問題対策委員会と各部局に設けられた人権問題に対応する委員会との連携・協力体制を確立する。第四に、学生と教職員を含む全学構成員を対象とした研修会を開催するとともに、本委員会のホームページを整備・拡充することにより、セクシュアル・ハラスメントの防止に関する認識の徹底に努める。

学生・教職員におかれても、このたびの事件の重大さに思いを致し、セクシュアル・ハラスメントの再発防止のための意識改革に努められ、快適な教育・研究環境及び就労環境の維持・発展に一層協力されることを強く要望する。

事態を深く反省し、更に全学をあげてセクシュアル・ハラスメントを防止するため、真摯に取り組む所存である。

教職員・学生にあっても、セクシュアル・ハラスメントの防止に関して認識を深められることを強く望むものである。

平成13年6月19日

京 都 大 学

大学の動き

長尾総長のアメリカ合衆国，中華人民共和国及びフランス共和国訪問

長尾 真総長は，4月20日からアメリカ合衆国，中華人民共和国及びフランス共和国に出張し，5月4日に帰国した。

アメリカ合衆国では，アメリカ大学協会100周年を記念して開催された“Association of American Universities Spring 2001 International Convocation”に出席した。

また，中華人民共和国では，本学との「学術交流に関する一般的覚書」交換校である清華大学を訪問し，同大学創立90周年記念式典に出席するとともに，

記念フォーラムにて“International Interdisciplinary Researches: Current Status in Japan and at Kyoto University”と題し，講演を行った。

さらに，フランス共和国では，第2回日仏高等教育シンポジウムに出席し，第二討論会「日仏におけるバイオテクノロジー及び情報科学の発達に対する公的支援」の議長を務めた。

なお，第2回日仏高等教育シンポジウムには，大山莞爾生命科学研究所教授及び本間政雄事務局長が出席した。

長尾総長の中華人民共和国訪問

長尾 真総長は，5月14日から16日まで中華人民共和国に出張し，“APEC HIGH LEVEL MEETING ON HUMAN CAPACITY BUILDING”に出席して，APEC経済首脳会合において提唱された，人的能力の育成のための方策について専門家の立場から発言した。

また，5月27日から29日まで同国に出張し，“The

12th International Conference on New Information Technology”に出席して，“Elements for the Digital Library Development”と題し，講演を行った。併せて，清華大学を訪問し，副学長及び関係職員と産学連携に関し意見交換を行った。

博士学位授与式

5月24日(木)午前10時30分から，京大会館において，長尾 真総長，両副学長をはじめ，各研究科長等関係者出席のもと，博士学位授与式が挙行された。

総長から，各授与者に対し学位記（平成13年5月23日付）が手渡された後，総長の式辞があり，午前11時5分終了した。

なお，各研究科別内訳は次のとおりである。

また，式辞は総長室ホームページ（<http://www.adm.kyoto-u.ac.jp/soucho/home.htm>）に掲載されている。

研 究 科	課程博士	論文博士	計
文 学 研 究 科	1	-	1
法 学 研 究 科	-	1	1
経 済 学 研 究 科	2	2	4
理 学 研 究 科	8	1	9
医 学 研 究 科	13	2	15
薬 学 研 究 科	-	3	3
工 学 研 究 科	10	3	13
農 学 研 究 科	5	7	12
情 報 学 研 究 科	1	1	2
計	40	20	60

人権に関する研修会の開催

6月6日(水)午後3時から、附属図書館3階AVホールにおいて「人権に関する研修会」が開催され、山崎高哉同和・人権問題委員会委員長の開会の辞、尾池和夫副学長の挨拶の後、2時間にわたる講演を、本学教職員及び学生約120人が熱心に聴講した。

本研修会は、学内外から講師を迎え、本学教職員を対象として同和・人権問題の啓発を図る目的で、毎年、春秋の2回開催していたが、今回から学生も聴講可能とし、啓発活動の強化に努めることになった。今回は、昨年12月以降、部落差別を表すピラや落書き等、部落差別事件が続発したことに鑑み、近畿大学人権問題研究所北口末広教授を講師に迎え、「部落差別の現状と今後の課題」というテーマで講演をお願いした。講演後、質疑応答が活発に行われた。講演要旨は、後日掲載の予定である。



創立記念式の挙行

6月18日(月)本学創立104周年記念式が、元総長、名誉教授、各部局長等関係者多数の出席を得て、本学総合体育館において挙行された。

式は午前10時に始まり、総長式辞、永年勤続者の表彰、永年勤続者代表松下隆壽さん(再生医科学研究所)の答辞があり、午前10時35分終了した。

本年表彰された永年勤続者は、30年勤続者73人、20年勤続者40人の計113人であった。

なお、表彰された方の氏名は、6月22日付けの学報第4785号に掲載されている。

また、式辞は総長室ホームページ(<http://www.adm.kyoto-u.ac.jp/soucho/home.htm>)に掲載されている。



平成13年度外国人留学生歓迎パーティ

平成13年度入学外国人留学生歓迎パーティが6月15日（金）午後6時より、京都ガーデンパレスにおいて総長主催のもとに開催された。

外国人留学生，総長及び部局長，指導教官並びに来賓として京都府，京都市等の国際交流関係者，約250人が出席して盛大に行われた。

パーティは，長尾 真総長の歓迎挨拶，新入留学生を代表して，東南アジア研究センター研究生で，

イスラエルより来日した OTMAZGIN NISSIM さんが日本語によるスピーチを行い，塩田浩平総長補佐の発声で乾杯をした。

パーティは終始和やかな雰囲気の中で行われ，途中，京都大学奇術研究会の湯川洋介君が奇術を披露し，歓迎ムードを盛り上げた。

なお，5月1日現在の本学の国（地域）別留学生数は次のとおりである。

地域	区分 国名等	学 部		大 学 院			研究生等	計
		学生	聴講生	修士課程	博士課程	聴講生		
ア ジ ア 州 (26)	バングラディシュ			3	13		3	19
	カンボジア	5		1	1		1	8
	中国	75	1	94	123		121	414
	香港				1		2	3
	インド				1		1	2
	インドネシア	5		11	23		4	43
	イラン				3		5	8
	イスラエル				1		3	4
	ヨルダン				2			2
	韓国	11		35	106		44	196
	ラオス				2			2
	レバノン						1	1
	マカオ						1	1
	マレーシア	1		2	7		2	12
	モンゴル	5		1	2			8
	ミャンマー				3		1	4
	ネパール				2	4		6
	パキスタン					2	1	3
	フィリピン	4		1	5		5	15
	サウジアラビア				1			1
シンガポール	7		1	2		1	11	
スリランカ					1		1	
台湾	2		23	25		25	75	
タイ	4		8	21		15	48	
トルコ	1		1	4		3	9	
ベトナム	5	1	2	3		7	18	
大洋州 (2)	オーストラリア	1		4	2		3	10
	ニュージーランド	3		1	1		2	7
ア フ リ カ 州 (13)	アルジェリア			2				2
	コンゴ						1	1
	コートジボワール				2			2
	エジプト				4		1	5
	エチオピア				2			2
	ガーナ				2			2
	ケニア			1	1			2
	モロッコ	1		2	1			4
	ナイジェリア			1				1
	南アフリカ				1			1
	スーダン				1		1	2
	タンザニア				8			8
	チュニジア				1			1

地域	区分 国名等	学 部		大 学 院			研究生等	計
		学生	聴講生	修士課程	博士課程	聴講生		
ヨ ー ロ ッ パ 州 (20)	オーストリア				1			1
	ベルギー			1	2			1
	ブルガリア	1						2
	チェコ				1			1
	エストニア							1
	フランス			3	2		10	15
	ドイツ				6		7	13
	ギリシア						1	1
	ハンガリー	1		3	1		2	7
	イタリア				3		1	4
	オランダ						5	5
	ノルウェー						1	1
	ポーランド			1	3		2	6
	ポルトガル				1		1	2
	ルーマニア	3		1	3			7
	スロバキア				1			1
	スペイン			1	2		1	4
	スウェーデン				1		3	4
	スイス				1		4	5
イギリス				1		5	6	
N I S 諸 国 (4)	ベラルーシ				1			1
	カザフスタン					1		1
	ロシア連邦	1			2		6	9
北 ア メ リ カ 州 (5)	ウクライナ				2			2
	カナダ				3		8	11
	コスタリカ				1			1
	ホンジュラス						1	1
	メキシコ			1	1			2
アメリカ合衆国		1	1	8		20	30	
南 ア メ リ カ 州 (7)	アルゼンチン			2	1		1	4
	ブラジル			4	6		8	18
	チリ			1				1
	コロンビア			1	2		1	4
	パラグアイ						1	1
	ペルー				2			2
	ベネズエラ				3			3
合 計 (77)	136	3	220	440		350	1,149	

総数1,149人中、留学ビザ留学生は1,123人

部局の動き

総合博物館いよいよ公開

総合博物館では、昨年8月31日に新館（南棟）が完成し、その後、今年1月から2月にかけて自然史系・技術史系の学術標本資料約200万点を関係部局から搬入・収蔵し終えました。さらに新館（南棟）での展示工事も完成し、平成13年5月30日に待望の竣工式を、そして6月1日からはいよいよ一年を通じての一般公開を開始しました。

竣工式は、大学側より長尾 真総長、文部科学省より文部科学事務次官小野元之氏らのご臨席を得、元総長、本学名誉教授、展示に協力いただいたマレーシアの研究者を含む関係者200余名のご出席をいただき盛大に催されました。式辞や祝辞の中で、社会に開かれた大学の窓口としての総合博物館の役割に対する期待が異口同音に述べられ、大学がより多くの貢献を社会から求められている今日、館の存在意義と重責を再認識させられました。

総合博物館は、平成8年の文部省学術審議会による「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について」の答申に基づき平成9年4月に設置され、次の3つの使命を担っています。つまり、1) 京都大学が開学以来100年以上にわたって収集してきた貴重な学術標本資料250万点を大切に収蔵し、2) それらを第一線の研究・教育活動に活用すること、さらに、3) 研究・教育活動の成果を広く一般に公開することです。新館の竣工によって、総面積11,729㎡、収蔵面積延べ約4,000㎡、展示面積約2,500㎡となり、上記3つの重大な使命を果たすにふさわしい空間を擁した国内最大規模のユニバーシティ・ミュージアムとして出発しました。

総合博物館では、一般公開に向けて、常設展示の充実に力を注いできました。それは、研究教育の成果を社会にわかりやすく情報発信し、「大学の社会に開かれた窓口」としての役割を積極的に果たすことを目指してのことです。とりわけ、永年の実績をもつ文系展示に劣らぬ内容の自然史展示を新館においてどう作り上げるかが課題でした。幸い探検大学の異名をもつ京都大学では、広く野外研究、つまりフィールド・サイエンスが行われており、これに焦点をあてて、一般の方に楽しく京都大学の自然史研究を紹介する展示をつくりあげることができました。

新館の展示室に入ると、まず直径80cm日本最大級



象の進化コーナー

のアンモナイト化石が出迎えてくれます。そして、京都盆地の生い立ち、ナウマン象化石、恐竜の足跡化石、「天才チンパンジー」アイちゃんとの知恵比べコーナー、コムギの起源の探求、芦生の演習林の生態系の展示などをご覧ください。その奥には、京都大学がマレーシアと共同研究を行っている熱帯雨林の紹介コーナーがあり、直径6m、高さ12m、巨大な板根をもつマメ科の植物コンパシアを中心としたジオラマが出現します。またマレーシアの研究機関の好意で貸し出された多種多様な昆虫も展示されています。三高時代の理科機器や工学部で保存されていたメカニズム模型など、技術史資料も展示されています。文化史では、石棺や埴輪を中心とした「日本古代文化の展開と東アジア」など、従来からの奥深い内容の展示をご覧ください。また展示場内には、100インチディスプレイ付きの円形劇場（ミュージアム・ラボ）を設置しており、名誉教授や教官のご協力を得て、一般観覧者向けに研究の面白さについてのレクチャーを頻繁に行いたいと企画中です。

常設展示以外にも、年2回の企画展を予定しており、現在は「京都大学の遺伝子研究」（9月30日まで）を開催中です。

なお、総合博物館は、月・火曜日をのぞく毎日（12月28日～1月4日をのぞく）9:30～16:30（入場は16:00まで）の間開館しています。また、職員・学生は職員証・学生証を呈示することにより無料で観覧できます。

5月30日の竣工式での総長の挨拶は、総長室ホームページ（<http://www.adm.kyoto-u.ac.jp/soucho/home.htm>）に掲載されています。

（総合博物館）

日誌

2001.5.1 ~ 5.31

- | | | | |
|------|----------------------|-----|--|
| 5月8日 | 将来構想検討委員会 | 27日 | 総長,中華人民共和国を訪問(29日まで) |
| 11日 | 人権問題対策委員会 | 30日 | 連合王国 John E. MIDWINTER 英国電気学会会長他3人来学,総長他と懇談 |
| 14日 | 学生部委員会 | 31日 | アメリカ合衆国 Richard C. ATKINSON カリフォルニア大学機構長他3人来学,総長他と懇談 |
| " | 総長,中華人民共和国を訪問(16日まで) | | |
| 16日 | 国際交流委員会 | | |
| 22日 | 評議会 | | |
| " | 大学評価委員会 | | |

訃報

このたび、野口雅代^{のぐちまさよ}宇治地区事務部研究協力課文部科学事務官、稲本晃^{いなもと 晃}名誉教授が逝去されました。

ここに、謹んで哀悼の意を表します。

以下に両氏の略歴、業績等を紹介します。

野口 雅代 宇治地区事務部研究協力課文部科学事務官



野口雅代氏は、5月21日逝去された。享年29。

同氏は、平成7年4月原子エネルギー研究所へ就職され、以後、エネルギー理工学研究所、総務部総務課、総務部企画課、

宇治地区事務部研究協力課に勤務された。この間6年余りにわたり、大学行政、なかでも庶務事務に大いに貢献された。

(宇治地区事務部)

稲本 晃 名誉教授



稲本 晃先生は、5月29日逝去された。享年91。

先生は、昭和8年京都帝国大学医学部を卒業後、医学部副手、臨時附属医学専門部助手、同助教授、医学部講師を経て、昭和31年京都大学医学部教授に就任、麻酔学講座を担任された。昭和48年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和39年から同43年まで医学部附属看護学校長を務められ、看護教育にも尽力された。

本学退官後は、昭和48年から同51年まで愛知医科大学教授、昭和51年から同56年まで大阪歯科大学教授を務められた。

先生は、日本の麻酔学における創始者、開拓者と

して、医学の進歩と発展に貢献され、顕著な業績をあげられた。臨床医学の面では、フッ化炭化水素系麻酔薬「ハロセン」の臨床応用の確立は特筆すべきものである。一方、麻酔学の基礎的研究でも、電子顕微鏡を駆使した麻酔と生体臓器微細構造の組織学的研究と、中枢神経の電気生理学的研究を一貫して続けられ、その業績は高い評価を受けてきた。

また、世界麻酔学会連合、日本麻酔学会、日本歯科麻酔学会、日本輸血学会、日本救急医学会などにおいて、会長等の要職を歴任され、昭和51年には Fellow of Faculty of Anaesthetists, Royal College of Surgeons に推挙された。

これら一連の功績により、昭和56年11月勲三等旭日中綬章を受けられた。

(大学院医学研究科)

随想

教育不在？

名誉教授 布川 昊



我国に対する国際評価は、最近頓に下がっている。一時は Japan as No. 1 とまで持ち上げられていた。今は十数位であるという。それでも製造業は第2位を保っている。しかし高等教育は第47位、これが足を引っ張っている。こんな報告が JABEE^(注1) 対策を話し合ったある会合であった。先日の TV でも、遠山文科相が「大学教育改善にもっと力を入れねばならぬ。なにしろ世界最低の49位だから」と発言していた。もともと「日本の大学は教育不在である」と海外の評判も芳しくなかった。企業も以前は「大学は素材を提供してくれればよい。製品に仕上げるのは会社で」と鷹揚であった。アジア諸国の急追と長引く不況で「ゆとり」が無くなったのであろう、今は即戦力の養成を大学にも求めている。政府も教育改革、教育改革と叫び始めた。その議論の進め方には、どこかの外れな感がしないでもない。しかし大学側にも非が無いわけではない。改めるべき所は改めなければならない。

大学人には研究を重んじ、教育を軽んじる性向がある。これが時としてモラルの喪失につながっている。ある時 JR の車中で、若者が声高に話していた。「助教授になるには二桁の数の論文が必要である。それで互いに連名にし合っている。何ら寄与していないが名前を付けて貰っている論文が、自分にも6篇ある。」当然周りの乗客の耳にも入ってくる。私の知っている教授と思われる名前もチラホラする。堪り兼ねて厳しく注意した。研究は利己的、教育は利他的。両者は本質的に異なった側面を持っている。教育の軽視は大学の荒廃を招きかねない。

研究、研究といっても他人の研究の追試、例題計算や所謂「銅鉄主義」^(注2) 程度のもが多い。これら模倣的研究を教育より上位に置く気にはなれない。良き教育には、その程度の創意工夫は常に必要である。教科書は歴史に残った独創的研究に満ちている。それを未熟な学生に正しく理解させるのは良心的な教師にとっても至難の技である。教育は優れて創造的な営みである。それに研究の価値を判断する能力

は高い教養から生まれる。敢えて研究と教育に順位を付けるとすれば独創的研究、良質な教育、模倣的な研究の順であろうと私は考えている。

従来の日本の大学人の教育に対する一般的な考え方は「(1)教官は夫々の分野の専門家であるから、講義はその方に任せ、外から口を挟むべきではない。(2)学問は本来自分でやるべきものである。学生は講義の記憶を手掛りにして、将来必要に迫られた時、改めて自分で学び直せばよい。」であった。これに教訓「師、師たらずとも、弟、弟たるべし。」を加えると、教師は不要という事になりかねない。ある大企業の幹部となっていた後輩が言っていた。「現場で問題が生じた時、色々な本を参照する。日本人の書いたものは、色々高度なことは書いてはあるが、肝心なことは書いてない。役に立たない。米国のテキストを2種類も読めば、大抵解決の手掛かりは得られる。」と。

ホワイトヘッドは教育の要諦はただ一つ「あまり色々教え過ぎないこと 教えるときは徹底的に教えよ」と述べている。どうせ不勉強な学生には分からないであろうと、難しいことを御座なりに教えるのではなく「難しいことを易しく、易しいことを深く」教えねばならない。その為には「豊かな学殖と暖かい心」が必要である。ホワイトヘッドは又「数学的才能に恵まれた少数の学生に身の震えるほどの感動を与える題材は、多くの平均的な学生には深奥で理解し難い。そのような材料を一般の講義に取入れるのは危険である。」と警告している。一般の学生に興味を起こさせる工夫がつかない時には、そのような話題は控えるべきであろう。人を見て法を説かねばならない。

今日では、先端的専門分野は細分化し、所謂バベルの塔化している。それだけに専門基礎の教育では「大学の道は」と常に問い直しつつ、教官相互の意志の疎通を図らねばならない。そうでないと遠からず大学は世間から見放されてしまうだろう。単なる知識の伝達だけならロボットがもっと上手にやっける時代がすぐ其処までやって来ている。

(ふかわ ひろし 元工学部教授 平成8年退官、
専門は 制御工学 数学教育)

(注1) JABEE: Japan Accreditation Board for Engineering Education (日本技術者教育認定機構)

(注2) 銅鉄主義: 人が銅で行った研究を、鉄に代えてそのままなぞった研究

洛書

国際援助について思う

中原 俊隆



WHO 西太平洋地域事務局主催の家族計画セミナーに参加するために、フィリピンのマニラに旅したのは、昭和50年と52年の秋であったが、その時にはおよそ20年後に毎年この地を訪れることになるとは思いもよらないことであった。

当時の「家族計画」は、世界全体、とりわけ開発途上国の人口増加を抑制するというマクロ的な戦略であった。そして、わが国は戦後の混乱期に「家族計画」という名称で、人工妊娠中絶の合法化と効果が最も不確かな避妊法であるコンドームの普及で人口制御に成功した国として注目はされていたが、避妊効果が最も確実なピルと精管や卵管の結紮術を普及させるべきであるという極めて科学的に正しい方法を、途上国に対してインセンティブを与えて強引にでも普及させるべきであるという世界的な流れの中では、特異な国でもあった。この当時は国家が人口の抑制のために性という勝れて私的領域に介入することが了とされ、先進国が途上国でのこのような意味での家族計画に強力に援助をした時代である。しかし、このような家族計画が人々の間に受け入れ

られることはなく、ほとんど失敗したのは、当然といえば当然であった。

わが国で家族計画の思想が人々の間に定着し、実行されたのは、国家の人口抑制策に協力したためではないし、ましてや世界の人口爆発を憂えてのことではない。やはり、教育をはじめとする子供や家族の将来の幸せを考えてのことであり、このため、家族計画は母子保健の一部としてとらえられ、地域保健活動の中で実行され、そのことによって家族計画が成功したといえる。

平成5年以来国際協力医事業団の依頼でフィリピンの「家族計画・母子保健プロジェクト」を毎年訪問し、国内委員長としてプロジェクトの発展のお手伝いをさせていただいているが、家族計画を母子保健、そして広く地域保健の中でとらえ、人々の健康に関するニーズに合わせて普及を図っていくやり方は広く人々に受け入れられている。プロジェクトの指導で始まった住民自身による医薬品の共同購入や人形劇による健康教育活動などの地域保健活動が、住民自身により自主的に誇りを持って取り組まれるようになってきている。国際援助は、途上国の住民を対象とするならば、住民自身のニーズに応える姿勢とノウハウの提供が最も大切ではないかと思う。

(なかはら としたか 医学研究科教授)

